

## 授業者あとがき

学部2年生前期の授業科目である「教育学文献講読（2005）」のまとめを受講生の卒業間際によく完成させることができた。なんとか責任を果たしてほっとしているものの、もう2年半もすぎてしまい、当時の授業の熱い「体温」を忘れてしまった現在となって、こうして「あとがき」を書く結果となってしまったことは重ね重ね残念である。翌年度の「教育学文献講読（2006）」は「絵本の世界を読み解く」としてすでに小冊子にまとめているため、この授業の担当から「卒業」した今、薄らいだ記憶を辿り少しずつ思い起こしながら2005年度版を完成させることにより、この授業にも「卒業」の節目を与えたい。

さて、この年から「教育学文献講読」の時間はフィールドワークと区別して、文字通り文献を読むことになった。ただし、ここで読む「文献」はなにも外書である必要はなく、和書でも資料でも構わないということであったので、この年はマンガを題材とした。

具体的には朝日新聞（朝刊）で現在も連載中の「ののちゃん」（いしいひさいち）と、コミックの「ちびまるこちゃん」（さくらももこ）を取り上げ、両者の主人公を比較して「この30年間で子どもたちは変わったのか」を大きな問いとした。すなわち、授業者と同じ1965年（昭和40）生まれであるさくらももこ氏の分身である「ちびまるこちゃん」は、70年代当時の子どもを体現している。そこに流れている時間の流れ、ちびまるこちゃんを取り巻く人間関係、紙芝居や駄菓子屋などレトロで郷愁さえ感じさせられる外部環境等を見ていき、同様にそれから30年を経た2005年当時の子ども代表としての「ののちゃん」はじめ登場人物や彼女たちを取り巻く環境をみていくことによって比較し、上記の問いに答えていくこととした。

比較の結果、この30年間で子どもたちが変容したのではなく、子どもたちを取り巻く内外環境が大きく変化したのではないかという仮説を不十分ながらも結論づけられそうなほど、ニッポンの子どもたちを取り巻く状況は大きく変化している。30年前はもちろんケータイもコンビニもビデオもファミコンもファーストフードもファミレスもなかった。今の子どもたちにとって当たり前のものが何も揃っていないのである。

1980年代に生まれた受講生たちにとって、1970年代当時の子どもたちを取り巻く環境は想像を超えるレトロな風景であるようだった。かつてドッグイヤー等とよばれ、時間感覚がスピードアップしている今日、十年どころか「三年一昔」という言葉があるのならば、20年、30年なんて大昔であろう。

したがって、この授業はジェネレーションとの闘いでもあった。「先生は50歳ぐらいですか」「先生はうちのお母さんと同じぐらいですか」と質問されたことが印象的であった。たしかに私が大学に入った時の母の年齢（38歳）は越えていたものの、学生時代から20年も変わらぬ研究室にいるため、まだまだ学生気分が抜けきらない我が身にこれは衝撃的な出来事だった。時は確実に過ぎていたのである。

しかしながら時は止めることができず、過ぎ去っていくこの現実を静かに受けとめなければならない。本日の卒業式にあたってはその思いを強くする。

たしかに確実に時間は流れている。流行も変化し、その中で人々の意識は知らず知らずに変化している。本人の意識はそこまで追いついていないが、人々は同時代的に時代の空気に大きく揺れ動かされている。

下の2枚の写真をご覧いただきたい。これは30年前の子ども（左8歳、右9歳）である。今では決して見ないような半ズボンにハイソックスの姿でおまけにジャイアンツ帽（アンチとしては不本意ですが…）、バックの田園風景も今はすっかり街に変わってしまっている小倉・下曾根駅周辺である。右は子供会のキャンプに行く朝の写真で、その頃流行っていたブーツカット（当時はラップズボンとよばれていた）のジーンズ（Gパン）に麦わら帽子と気恥ずかしくなるほどこてこての出で立ちである。



最近の昭和30年代ブームや食玩ブーム、リバイバル流行のように変化に抗しようとする側面もある。右肩上がりでなくなったご時世でもあるので懐古主義的な意識もたいへんつよい。

2008年3月25日 卒業の日に  
元兼 正浩